

「業務内容改善に向けた当院の取り組みと今後の課題」

知多リハビリテーション病院 西田健二
助村龍哉

【背景】

当院、回復期リハ病棟が開設されて12年目となる。年々、回復期リハ病棟を開設する施設は右肩上がり増加しており、2015年度には7万7000床を突破している。これは、回復期リハ病棟協会が当初掲げていた「全国ベースで6万床」の整備目標を超え、一部地域では病床過剰により競争が激化している。また、厚生労働省は「量的充足」から「質的充足」を目指す方向に転換しており、2016年度診療報酬改定では「アウトカム評価」が導入されている。まさに、回復期リハ病棟の質が問われてきている。

【目的】

今回、回復期リハ病棟スタッフの業務や環境に対する意識を把握することで、チームアプローチの強化のための具体的な問題点の抽出や魅力のある環境作りなど質の向上に役立てたいと考え、意識調査をアンケートにて実施し、現状の把握と今後の課題が見えてきた為、その結果をまとめ報告する。

【方法】

当院回復期リハ病棟に関わるスタッフ77名（入社1年目のスタッフについては除外）を対象とした。アンケート内容は院長回診、カンファレンス、面談の3項目、その他要望について無記名・選択式・記述式で実施した。

【結果】

アンケート結果より、院長回診80%、カンファレンス92%、面談90%の割合で業務内容改善への取り組み後の方が良いという結果となった。記述式の結果では医師のカンファレンスでの拘束時間が減り、医師との連携時間が増加した・問題点への早期介入が可能となった・担当がカンファレンスに参加しやすくなった等の意見を聴取できた。

しかし、依然として形式的で意見交換が少ない、資料の簡潔化が必要という問題点も抽出できた。要望では院内勉強会の充実化、間接業務の改善に対する意見が多い傾向にあった。経験年数別では、大きな差異が認められなかったが、経験年数が上がるに伴い、マネジメント業務に関する意見が認められた。

【まとめ】

今回の取り組みは、情報共有の場を確保する目的として行った。現在、多職種で連携する時間を作ることで、問題点の抽出、方針の決定に対してチーム内で意思を統一し、早期から介入が行えている。また、業務の維持管理を管理職のみでなく、経験年数の上がったスタッフも共に行う部分が増えている。

業務の内容、主にスケジュールの改善は認めている為、要望にもあった間接業務の改善や院内勉強会の充実化など個人レベルの業務改善を図っていく。また院外・地域に向けてのアプローチ、教育体制をより強化し病院全体の質の改善を目指したい。今後、患者様へのアンケートを実施し客観的な意見を元に更なる検証を試みたい。